

# I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文化を比較するには、大きく分けて二つの方法があるといえる。

一つは、歴史上関係があったことが明らか文化を比較するもので、たとえば日本列島の文化と、中国大陸や朝鮮半島の文化の比較がそれにあたる。その場合、影響や伝播でんぱによっておこった変化、受けいれられたものと、受けいれられなかったもの、なぜそうだったのか、などが関心の対象となる。

もう一つは、地理的にも文化的にも著しくへだたり、相互に直接の影響関係がまったく、Aほとんどなかったような三つの文化を比較するもので、この本で私が用いるのはこの方法だ。私の場合、人類学を志してからの主な研究対象地域が、日本からはじまって、西アフリカ、フランスへと広がってゆき、二〇代のはじめから現在まで六〇年あまり、三つの地域を行き来して研究をつづけるうちに、ひとりりで身についた比較の方法でもある。

いまあげた第一の、連続のなかの比較を「歴史的」比較と呼ぶことができるのであれば、第二の断絶における比較は、「論理的」あるいは「発見的」比較といえるだろう。つまり、これから実例で示すように、まったく異なって見える三つの文化を、あえて比較してみることで、一つの文化だけを見ていたのでは気づかなかった隠れた意味を、発見することが可能になるからだ。

地測には、「三角測量」がある。私は地測の方法から考え方を借りて、文化の比較研究に応用してみたのだ。「文化の三角測量」と名づけたこの方法によって、研究者の属する文化にもとづく研究者の主観を、他の二つの文化の視点から、相対化してとらえ直すことも、できるのではないかと思う。

ただそのためには、視点となる他の二つの文化についても、言語から日常生活、価値意識、世界観など、計測の基点にすることができるだけの、知識や経験を身につけていることが必要だ。これは、一人の研究者の限られた時間と能力の範囲内では、十分に行うことが、現実には難しいといえるのだが。

この二つの方法のそれぞれについて、もう少しくわしく見よう。

第一の「歴史的」比較について。

焼きものを成形するときに使う轆轤ろくろが、大陸から日本にもたらされたことは歴史上明らかだ。C、日本では受けいれてから、回転の向きを逆に、時計まわりにして使うようになった。私自身の直接の見聞でも、ユーラシア大陸では、中国北部、西北部、中部、南部から、インド、トルコ、フランス、ノルウェー、スペインで反時計まわり、沖縄でも伝統的には大陸と同じだったようだ。なぜそうなったのか、十分に説得力のある答を、私はまだ見つけられずにいる。ここでは渡来したものが、逆向きになって受けいられる一例としてあげておく。

西アジアが起源とされる弦楽器も、日本へは中国大陸や朝鮮半島、琉球りゅうきゅうなどから伝えられた。D、日本では弦をこすって音を出す楽器は、大陸では逆に、胡弓こきゅうのように、ごく限られた範囲でしか用いられなかった。

西に向かつて伝えられた先のヨーロッパで、弦をこする楽器は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスなどさまざまに分化し、音の文化の中心の位置を占めるようになった。日本の場合とは、著しい違いだ。

明治の「文明開化」以後は、「音楽」という、西洋にならって新しくつくられた言葉とともに、「鋸のこぎりの目立て」などと悪口をいわれた音を出す、「提琴ていきん」（この言葉はもと、中国の二弦ないし四弦の、椰子やしの実の殻を二つ切りにした胴の、大型胡弓を指す言葉だった）、という訳語があてられたヴァイオリンの演奏が、その後日本でも盛んになり、西洋人と肩を並べる演奏家も出るようになってはしたが。

これに対して、弦をはじく琵琶びわは、古く唐楽とともに日本に伝えられて普及し、鎌倉時代にはこれを弾いて語る琵琶法師が、『平家物語』の担い手になった。のちに十六世紀後半の永禄年間、蛇皮線じやびせんとも呼ばれる琉球の三線さんせんが堺さかいに伝えられた。琉球では中国の三弦と同じく、右手人差し指にはめた水牛、牛、山羊などの角でつくった義甲ぎこう（爪、バチとも呼ばれる）で弾くか、義甲なしの爪弾きだったが、日本では蛇の皮の代わりに猫の皮を張り、この新楽器の演奏を担当した琵琶法師が、かどの尖とがった撥はちで演奏した。

このように、蛇の皮が猫の皮になって日本で使われはじめてから、わずか二〇〇年経つか経たぬかの明和年間には、もう「風が吹けば桶屋おけが儲もちかる」という俚諺りげんが、Eを示す、あるいはこじつけの理屈をからかう決まり文句として、浮世草子にも記され

るくらい、三味線は日本で普及した。

「風が吹けば桶屋が儲かる」のは、なぜか。蛇足<sup>G</sup>までに記せば、風が吹いて砂ぼこりが立つと、それが目に入って失明する人が増え、徳川時代のいわゆる座頭<sup>ざとう</sup>がふえる。座頭は当時のしきたりで、三味線を弾く生業につくことが多かった。三味線を弾く者が増えれば、それだけ猫を捕らなければならぬ。その結果、猫が減って鼠が増え、桶を盛んにかじる。だから桶屋が儲かる……。

三線が琉球経由で日本に取り入れられてから、棹<sup>さお</sup>の上方に日本独特の、一種の雑音発生装置「サワリ」溝をつけ、義太夫<sup>ぎだゆう</sup>、常磐津<sup>ときわづ</sup>、長唄など、ひろい範囲の語りもの、歌いものの伴奏楽器として、この俚諺がひろまる前にもすでに、三味線は日本で普及していた。時代をくだれば、清元<sup>きよもと</sup>、新内<sup>しんない</sup>、浪花節<sup>ななわぶし</sup>、民謡の伴奏楽器として日本人の生活にひろく根をおろした。大型の撥で叩くように弾く、つまり打楽器に似た音の効果を生む三味線は、琵琶もそうだが、語りものや音曲<sup>おんきょく</sup>の伴奏、つまり言葉に相槌<sup>づち</sup>を入れるのに適している。

このような撥弦楽器を私は、講師師<sup>はりおうち</sup>の張扇<sup>はりあふぎ</sup>などとともに、「相槌音具」と呼んでいる。そもそも日本語は、モノローグ、つまり単独の一方的な発話として、ながながと声にするのには適していない。キューバのカストロ首相のように、大衆を前にしての演説を、何時間もぶつのは向いていない。明治以後日本にも議会ができたが、それまでの日本には、しきたりがなかった「演説」の言葉は、初めのころ政権の座を占めつづけた伊藤博文<sup>いとうとう</sup>や山県有朋<sup>やまがたありとも</sup>をはじめとする長州人の、「〇〇であります」という、旧陸軍の軍隊言葉と同じ長州弁が基調になった。

日本語は、日常会話でもそうだが、聞き手の頻繁な相槌を必要とする。「相槌」とは、鍛冶の作業で鉄砧<sup>かねとしこ</sup>の上のせた刀身などを、座った親方の槌<sup>ち</sup>と交互に、向い側に立った一人か二人の弟子が長い槌で、トンカン、トンカンと親方に調子を合わせて打つ動作に由来する言葉だ。

相槌のついでに言えば、明治以後学校教育で教え込まれた、上位者への服従を表す「相槌ことば」の「ハイ」は、明治維新を推進し長州と国家権力を分かちあい、とくに警察の分野を掌握した薩摩方言<sup>さつま</sup>に由来している。元来、Yes(英)やOui(仏)のような、相手の問いを肯定する副詞ではなく、それ自体意味内容をもたない間投詞である「ハイ」に対応する、同意を示す語は、「武」

を重んじる薩摩や、四国西南部の一部を除けば、京都や江戸をはじめとして「ヘエ」「ヘイ」、東北の「ンダ」など、もつと軟らかい感じの間投詞が多かった。

第二の、断絶における「論理的」ないし「発見的」比較について、例をあげて述べよう。

フランスは、言葉づかいにやかましい一方で、日本の感覚からすると、「いただきます」も、「馳走さま」も、「行ってらっしゃい」も、「ただいま」も言わない、ぶっきらぼうな国でもある。だがグルメの国だけあって、食事を始めるとき言い交わす「ボナペティ(良い食欲を)」という文句は、昼食前の仕事が終わって別れるときの挨拶にもなっている。

ところでフランス語には、日本語の「ご苦労さま」にあたる、労をねぎらう言葉がない。私がパリでアパルトマンを借りて暮らしていたとき、修理をしにきてくれた職人が作業をしているところへ行つて、日本の感覚で「ご苦労さま」と言おうとして、そういう挨拶がないことに気づいた。

あとで、フランス語にくわしい何人ものフランス人の友だちや、地方の職人にも聞いてみたが、返ってきた答はすべて、相応の手間賃をもらって仕事をしているのだから、その上に言葉で感謝する必要はない、というものだった。

これは、キリスト教の根本からして、神と人間の契約の思想、フランス語でいうキリストによる Expiation (贖罪) の考えがしみついている人たちと、キリスト教信者でない私のような日本人や、あとで述べるアフリカのモシ人との、根本的な感覚のずれに由来しているのではないだろうか。このことは、travail(トラヴァーイユ(労働))というフランス語に象徴的に表れている。原罪を贖うために、人間が神から課せられた罰の考え方に由来しているからだ。

そもそも travail(トラヴァーイユ)という言葉は、古代ローマで拷問に用いられた、訊問される人間を縛りつける三本柱トリパリウム tripalium という語に由来している。『旧約聖書』「創世記」第三章で、禁断の樹の実を食べた女に、創造神ヤハウェが出産の「労苦」である陣痛・分娩を与え、男には食を得るために土地を耕す「労苦」(「創世記」のフランス語訳ではどちらも「トラヴァーイユ」)を課したという、人間の元祖がエデンの楽園から追放された物語にもとづいている。

フランス語では産室のことを salle de travail(トラヴァーイユの部屋)というし、男が骨を折って土を耕すこと(フランス語で

はラブル Labour だが、英語の Labour は、土地を耕す労働と、女性の分娩の両方を意味する)も、神から人間に課せられた罰というとらえ方がもとなつてゐる。

キリスト教世界では、このように人間の原罪を贖う行為だが、日本語で「はたらく」「はたらき」は、「あつばれなはたらきをした」などというように、元來、報酬を求めない献身的行為を意味している。これは主人と従属者、年長者と若年者、師匠と弟子など、恩と義務、尊敬と卑下などの不平等な二者関係のなかでの、経済外的強制が重要だったこととも関連しているだろう。

西アフリカ、ブルキナファソのモシ社会は、私の研究の結果では、おそらく十五世紀くらいから、何階層にもなった王制社会が形成され、いくつもの地方王朝の分裂や併合をくりかえしたあと、十九世紀末のフランスの軍事征服と植民地支配にいたった。伝統的には、何階層にもなった王／臣下、首長／家來、長上／従属者関係の、網の目から成り立っている。

日常の挨拶ひとつでも、たいそう込み入っているのはそのためだ。

異文化の社会に入るとき、まずおぼえておくべき「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」にあたる定型句が、モシ語にはない。なぜ、ないかという点、旧モシ王国の社会では、二人の人間が出会ったとき、別れるとき、当事者二人それぞれの、身分、地位、年齢の上下、その時の状況などによって、言うべき挨拶の言葉が同じではないからだ。

「ありがとう」についても同様で、何がどうありがたいのかを、いま述べた、込み入った当事者同士の関係のなかで、述べなければならぬ。ごく略式には「バルカ」という、神の祝福を意味するアラビア語に由来する言葉があるが、日本語なら「サンキュー」というようなもので、一人前の大人が使う言葉ではない。何がどうありがたいかを、先に述べたような込み入った人間関係のなかで、言葉をつくして述べるのが正しい。思えば日本でも、一昔前までは、二人の夫婦人が外で出会ったとき、「先日は結構なものを頂戴いたしました……」といった感謝の文句を、お辞儀をくりかえしながら、互いに長々とつらね合ったものだ。

ただ、「礼をつくす」「挨拶する」など多様な意味範囲をもち、丁寧表現の補助的動詞として日常よく使われる「プーセ」*puuse* をつけて、*Puus barkai* (ありがとうございます) と言ふことはよくある。

モシの王制社会では、物で納める年貢のようなものは、決まった形ではなかったが、王さまの畑仕事に臣下が動員されて無料奉

仕するしきたりはあった。そのため、王さまの耕地はひろく、そこからとれるトウジンビエやモロコシなど、主食や酒のもとになる穀物の量も多かったのだ。

ただ、モシ語での「労働」*tuunde* (トゥームデ、複数形は *tuma* トゥーマ)、動詞形「はたらく」*tume* (トゥメ)には、このような王に奉仕する労働の意味は、とくに含まれていない。

私が素晴らしいと思うのは、他人が働いているのを褒めたたえ、励ます表現、*Tuntunde!* (トゥムトゥムデ！) ご精が出ますね!) や *Ne y tuntuogo!* (ネ・イ・トゥムトゴ！) 頑張ってください！ 直訳すれば「あなたの骨の折れる労働と共に！」など、働いている人に共感し、働いている人を励ます慣用句があり、働いている人に向かって、日常生活で実に頻繁に、遠くからでも、大声で投げかけられることだ。

こうした励ましの声をかけられた人は、作業の手を休め、腰を伸ばして、男なら *Naai* (ナー) または *Naabai* (ナーバ) 、女なら *Aii* (アイー) と、相手に負けない大声で答える。とにかく、元気が出るし、たいそう気持ちのよいしきたりだと、私は賛嘆している。

(川田順造『運ぶヒト』の人類学』岩波書店 二〇一四年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 空欄部 A、C、D に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

号は 。

- ① A…あるいは C…けれども D…だが
- ② A…もしくは C…だが D…そのため
- ③ A…または C…とはいえ D…あるいは
- ④ A…だが C…したがって D…しかし
- ⑤ A…あるいは C…そのため D…だが

問二 傍線部 B 「文化の三角測量」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① 歴史上関係があったことが明らかな日本列島、中国大陸、朝鮮半島の文化を比較すること。
- ② 相互に直接影響関係のない日常生活、価値意識、世界観の三点を研究者の主観によって再解釈すること。
- ③ 地理的、文化的にもへだたり、相互に直接影響関係のない三つの文化を相対化してとらえ直すこと。
- ④ 研究者の属する日本、西アフリカのモシ社会、フランスのキリスト教世界の歴史的なつながりを説明すること。
- ⑤ 地測の三角測量を活用し、地理的な隔たりの大きさと文化的な差異の大きさに関係性があるかを調査すること。

問三 空欄部 E に入る文章として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 3。

- ① 因果関係は不明だが、現実には起きている結果がすべてであること。
- ② 因果関係を把握すれば、多くのことは論理的に説明できること。
- ③ 因果関係が人間の理屈を超越した自然現象の連なりであること。
- ④ 因果関係は天気や商売のように構造を説明するのが難しいこと。
- ⑤ 因果関係の思いがけない連鎖が思いがけない結果を生むこと。

問四 傍線部 F 「三味線は日本で普及した」と筆者が考える理由は何か。空欄部を次の形式に従って三十五字以内で記しなさい。ただし、「モノログ」、「相槌」の二語を必ず用いること。解答は 国語解答用紙。

三味線は、三十五字以内 相性が良かったから。



問五 傍線部G「蛇足」の類義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

4。

- ① 夏炉冬扇
- ② 竜頭蛇尾
- ③ 円頭方足
- ④ 春露秋霜
- ⑤ 冬月赤足

問六 傍線部H「モシ人との、根本的な感覚のずれ」が文化の三角測量によって明らかになった例として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

5。

- ① 信仰する宗教の違いによって労働に対する価値観が大きく異なるため、仕事への感謝の仕方も違ってくること。
- ② 労働が他の存在から強制されたものだという意味合いが言語に含まれているかどうかで日常の慣習が変化すること。
- ③ キリスト教ではない人からすると、労をねぎらう言葉が存在しないフランスの文化に違和感を感じてしまうこと。
- ④ トラヴァーイユというフランス語が出産や土地を耕すことに由来しているように、言語は多様な意味を持っていること。
- ⑤ モシ社会はフランスの植民地だったことから、労働の概念にフランスの影響が色濃く反映されていること。

問七 傍線部Ⅰ「日本語で『はたらく』『はたらき』は、『あっぱれなはたらきをした』などというように、元来、報酬を求めない

献身的行為を意味している」と筆者が考える理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 「はたらく」ということが、金銭的な報酬ではなく、誰かの役に立つという経済外的な報酬を得る活動だから。
- ② 「はたらく」ということが、状況や立場に関係なく見返りを求めないで献身的に職務を全うすることだから。
- ③ 「はたらく」ということが、日本においても神と人間との契約であり、原罪を贖う役割を担っているから。
- ④ 「はたらく」ということが、報酬を求める行為ではなく、自分のやりたいことを実現させるための手段だから。
- ⑤ 「はたらく」ということが、対等ではない関係によって成立している強制力に基づいた自己犠牲的な行為だから。

問八 傍線部Ⅰ『こんにちは』『さようなら』『ありがとう』にあたる定型句が、モシ語にはない」理由として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① バルカという言葉で意思疎通ができるため、多様な言語表現が生まれなかったから。
- ② フランスの軍事征服と植民地支配の影響で、フランスと同じ挨拶の文化が浸透しているから。
- ③ 「礼をつくす」「挨拶する」など多様な意味範囲を持つ「プーセ」という補助動詞がよく使われるから。
- ④ 当事者間の身分、地位、年齢の上下といった関係性や、その時の状況で挨拶の言葉が変わるから。
- ⑤ 他人の労働を褒め、励ます「トゥムトゥムデ」といった言葉が挨拶のかわりに頻繁に使用されるから。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

8

く

12

1 しし座はコウドウ十二星座の一つである。

8

- ① 候
- ② 攻
- ③ 航
- ④ 黄
- ⑤ 稿

2 外来種がコシヨウの生態系に影響を及ぼしている。

9

- ① 沼
- ② 症
- ③ 翔
- ④ 賞
- ⑤ 抄

3 将来はホウドウ機関に就職したい。

10

- ① 動
- ② 道
- ③ 同
- ④ 働
- ⑤ 導

4 その人とは似たようなキョウグウだった。

11

- ① 共
- ② 教
- ③ 鏡
- ④ 協
- ⑤ 境

5 選挙への出馬要請をコジした。

12

- ① 孤
- ② 個
- ③ 己
- ④ 固
- ⑤ 故

## II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ルース・ベネディクトが文化の類型を「罪の文化」と「恥の文化」の二つに分け、日本の場合を後者の典型としてあげて以来、それについて日本の学者の側から若干の批判があるにも拘らず、外国の日本研究者たちは大体それを承認しているように思われる。私自身は、どちらかといえば彼女の肩を持ちたい気がするが、それは日本人の心理に対する彼女の鋭敏な感覚に教えられることが多かったためで、彼女の理論をそのまますべて鵜呑みにするつもりはない。むしろその点<sup>A</sup>についてはかなり問題が存するといわねばならないのであって、まず第一に、私は彼女がその考え方に価値判断をしのびこませていることが問題であると思う。というのは、罪の文化は内面的な行動規範を重んじ、恥の文化は外面的な行動規範を重んずるという時、ベネディクトの主観において、前者が優れており、後者が劣っているとされていることは明らかなのである。第二の問題点は、彼女の考え方において罪と恥の感情が相互に全く無関係であるかのごとく前提されていることである。このことは事実と明らかに相違する。なぜならこの二つの感情は同一人物がしばしば同時に意識するものであって、相互に極めて密接な関係があると考えられるからである。すなわち罪を犯した人間は、しばしばそのような罪を犯した自分を恥じるのではなからうか。このようなわけで、ベネディクトの考えの前提自体にはかなりの問題が存するが、しかしそれにも拘らず、彼女が日本の文化を恥の文化として特徴づけることによって、何かある非常に大事なことをのべているという印象は否定することができないと思う。そこで以下この点をもっと詳細に検討してみることしよう。

まず西洋人の眼に日本人の罪の感覚があまり深刻とは映らない事実から考えてみよう。これは得てして西洋人が罪悪感をもつばら個人の内部の問題であると考え勝ちなのに対し、日本人にそのような考えがないことが原因しているのであろう。もちろん日本人が罪悪感を持たないなどということがあろうはずがない。ただ日本人の罪悪感<sup>B</sup>は、自分の属する集団を裏切ることになるのではないかという自覚において、最も尖鋭<sup>せん</sup>にあらわれることが特徴的である。実は西洋人の罪悪感の場合であっても、その根底には裏切りの心理があると仮定することができるが、彼らはそのことをふつう意識はしない。これは彼らが古来何世紀もの間キリスト教

によつて教化された結果、はじめ彼らの道德意識の中でも重要な役割を演じていたにちがいない集団が神にとつて代られ、ついで近世以来この神も蒸発して個人個人の意識だけが問題にされるようになったからである。それでも精神分析の知見ちけんによれば、西洋人の罪悪感ざいあくかんは精神内部に形成されている超自我ちやうじが\*に背くことそむによつて生れる、というのであるから、裏切りの要素が全くなくなつてしまつてゐるわけではなさそうである。もつともこの超自我はいわば精神内部の一機能であると定義されてゐるのであるから、その中に両親の影響などもともと個人的なものが含まれてゐたとしても、その性格は本質的には非個人的なものである。したがつて彼らの罪悪感の中では裏切りの心理が痕跡こんせきに留まり、強く意識されることがなくなつてゐるのである。

これにひきかえ日本人の場合は、上述したごとく、自分がそこに属してゐる人たちの信頼を裏切るといふことに最も強く罪悪感を感じるのであるが、このことをいいかえて、罪悪感ざいあくかんは人間関係かんせうの関数であるといつてもよいであろう。例えば、相手が自分に一番近い身内殊に親の場合は、普通あまり罪が自覚されないが、これは両者が密着してゐて、どんなに裏切つても許されるという甘えがあるからであると思われる。しかし「死んで知る親の恩」というように、親の死後これまで抑圧されてゐた罪の意識が自覚されることはある。一般的にいえば、日本人は裏切りが関係の断絶に導きやすい義理的な関係の中で最も頻繁に罪悪感を經驗する。したがつて前に説明した「すまない」といふ言葉がその場合の罪悪感の告白として最もふさわしいものとなる。なお罪の感覺そのものは、「いけない」ことを仕出かした時に始まるといえるが、しかし「いけない」ことをして「すまない」と思うのである。内面的な罪の自覚とはならないと一般に考えられてゐる。それ故「すまない」といふ罪悪感ざいあくかんは当然實際の謝罪行為しゃざいに直結する。このように日本人の罪悪感ざいあくかんは、裏切りに發して謝罪に終るといふ構造を極めて鮮明に示してゐるが、これこそ実は罪悪感の原型なのであつて、ベネディクトにこのことが見えなかつたのは、まさに彼女の文化的 C の故であるといわねばならないと思うのである。

(中略)

イデオロギーというのは元來思想についての研究を意味する言葉であるが、今日ではそれは一つの社会の性格を支える思想的バックボーン、したがつてそのような思想を體現してゐる社会体制をさすために転用されることがあるようである。これはイデオロ

ギー的に分極化した現代の世界情勢から生れてきた新たな用法であると思われるが、この用法によると、日本のイデオロギーはまさに甘えのそれであったし、現在もまだ多分にそうであるといつてよいと私は思っている。私は社会学者ではないので、この点を論証するに足る、社会体制や社会の枠組みについての専門的知識は持ち合わせていない。ただ私はたまたま治療していたある患者の言葉にヒントを得て、それ以来、従来漠然と日本精神とか大和魂やまとたましいといわれたり、あるいはもつと具体的に尊皇思想とか天皇制のイデオロギーといわれているものが、実は甘えのイデオロギーとして解し得ることに、確信を持つに至ったのである。

ある患者から得たヒントというのは次のようなことである。彼は治療が始まってしばらくしてから自分の依頼心をあらためて自覚するようになり、ある日次のようにのべた。「人間、子供の時は親にたよっていて、大人になれば自分にたよって生きるようになる。これは誰でもそうだと思うのですが、僕はその途中で躓つまずいたと思うのです。たよりたいと思うけれど、誰もたよらしてくれない。もう半年ぐらいになりますが、母親に代る人がいればよいと思っていました。何でも打ち明けることができて、僕を泳がしてくれる人。しかし考えてみれば、僕はそれでよいけれど、相手は迷惑すると思います。先生にもこの頃はただ愚痴ぐちだけをいいに來ていたのです。」以上の陳述ちんじゆつによってこの患者が満たされない甘えの願望についてのべていることは明らかである。D 彼はその後間もなくして同じ気持を次のような言葉で表現した。「自分を輔弼ほひつしてくれる人がほしい。対外的には僕が責任を持つのですが、しかし実際には僕に助言と承認を与えてくれる人です。」彼がここで輔弼ほひつという戦後あまり聞かなくなった明治憲法の用語を使ったのは、彼がたまたま法科の学生であったからであろう。F それは彼の心理的洞察を示すものでもあった。というのは、彼はかつては天皇についてだけ使われた輔弼ほひつという言葉を自分にあてはめることによって、自分の内的欲求を表現するとともに、同時に天皇の地位の心理的意味についても解明しているということが出来るからである。

天皇は、諸事万般、もちろん国政に至るまで、周囲の者が責任を以て万遺漏ばんいろうなきよう取りしきることを期待できる身分である。

G 天皇はある意味では周囲に全く依存しているが、しかし身分上は周囲の者こそ天皇に従属している。依存度からすれば天皇はまさに赤ん坊と同じ状態にありながら、身分からすれば日本最高であるということは、日本において幼兒的依存が尊重されることを示す証拠とはいえないであろうか。天皇に限らず日本の社会ですべて上に立つ者は、周囲からいわば盛り立てられなければ

ばならないという事実が存するが、これも同じような原則を暗示するものである。いかえれば、幼児的依存を純粹に体现できる者こそ日本の社会で上に立つ資格があることになる。素直ということが古来最高の美德としてもはやされていることは、この点を裏書きするものといえるであろう。なおベネディクトが指摘している、日本の社会では幼児と老人に最大の自由と気ままが許されているという事実も、このことに関係があるであろう。もともとこの最後にあげた点は、世の中が次第に世智辛<sup>せちがら</sup>くなってきた今日では、もはや往時のごとくではないのかもしれない。しかしそれでもまだ多分にその傾向が存するといつてよいと思われるのである。

以上のように見てくると、新憲法に「天皇は日本国家の象徴である」という条項を設けたのは、まことにふさわしいことであつたといわなければならない。このところは明治憲法では「天皇は神聖にして侵すべからず」となっているが、この方が新憲法よりおごそかで宗教的なニュアンスがあるにせよ、両者の間に本質的な差異はないものと思われる。ところで明治憲法がある意味で宗教的性格を持つに至つたのは、憲法の草案者である伊藤博文等が欧州の憲法政治の基礎に宗教があると看取<sup>かんしゆ</sup>したことが影響しているようである。というのは伊藤博文自身、枢密院の帝国憲法草案審議においてこのことに言及し、わが国の憲法政治の精神的機軸としては皇室の外にこれといったものがないことをのべているからである。すなわち彼によって皇室はキリスト教の精神的代用品とされたわけであるが、そのことの功罪はともかく、日本の在来の宗教が頼むに足らず、ひとり皇室を宗家<sup>そうけ</sup>とする家族国家という古来の觀念のみが人心統一に寄与し得ると見た彼の考えは、一つの見識を示したものである。もともと歴史家の研究によれば、日本の皇室も古代においては結局外来の征服者であつたということである。しかしその後の歴史において皇室が社会の精神的中心となつたことは否定できないし、殊に近世以降は、時の権力者に対する抵抗精神が常に皇室を以てその拠<sup>よ</sup>り所としたという事実がある。いかえれば皇室は、前に「内と外」の項でものべたごとく、明治憲法の制定以前にも「おおよけ」として、ある程度まで西洋的なハプリック精神の代用品としての役を果した。実際、ともすれば閉鎖的なサークルに分割し易い日本の社会では、天皇の赤子<sup>せきし</sup>ということ以外に万人を包摂<sup>ほうてつ</sup>するために適切で効果的な理念は存しなかつたと考えられるのである。

これを要するに、日本人は甘えを理想化し、甘えの支配する世界を以て真に人間的な世界と考えたのであり、それを制度化した

ものこそ天皇制であったということができる。したがってまた明治以後やかましくなった国体護持こじの論議は、単に支配階級の政治的便宜べんぎのためにだけ発明されたものではなく、以上のべたごとき日本人の世界観を、外からの圧力に抗して保全したいという意図によっても裏打ちされていたと見なければなるまい。さらに先の大東亜戦争は、まさにかかる世界観を国外にまで及ぼそうという大義名分によって戦われたのである。もつともこの戦争が惨憺さんたんたる敗北に終り、日本国民がこれまで抛り所すにしていた国体とか日本精神に対する自信を全く喪失そうしつするまでは、天皇制の本質が何であるかを問うこと自体許されなかったという事情がある。丸山眞男氏は戦後逸早く、天皇制は無責任体制であると評したそうであるが、このような洞察とうさつが戦前から氏の所有するところであったにせよ、敗戦を経過いちばやしなければそれを公にすることはできなかったであろうし、先にあげた患者についても、もし戦前ならば、輔弼ほふしつというような天皇用語をかりそめにも彼自身について使うことはできなかったであろう。しかし問題は狭義の天皇制に限らない。義理人情とか報恩いの思想とかあるいは大和魂でも、それらが社会規制的に働いている間は、先に私が分析したようには、それらの本質が甘えの心理に存していることを認識することはできなかったのではなからうか。天皇が神話を自ら否定し、日本国の象徴となつて初めて、日本人一人一人の内心にひそむ甘えを明るみに持ちだすことが可能となつたと考えられるのである。

現代はイデオロギーとしての天皇制が崩壊ほうかいした時代である。そこでいわば無統制の甘えが世間に氾濫し、至るところに小天皇が発生している。しかし制度的なものが全く消失したわけではなく、また昨今は日本が経済大国として復興して来たためもあって、復古調ふこてうが云々うんぬんされるようでもある。そこで今少し天皇制と並んで甘えのイデオロギーを支えてきたと考えられる社会的慣習について考察してみよう。

まず第一にあげたいのは日本で非常に発達したといわれる敬語の使用である。敬語は文字通り自分より目上の人物を敬つて使われる言葉であるが、使われる側からすれば、敬して遠ざけられたというよりも、むしろ気持よく感ずることは疑いない。私はある機会から、目上に使う敬語と小さな子供に使う言葉使いが非常に似ているのではないかと思うようになった。例えば、「坊ちゃんはお利口りこうさんですね」とか「お嬢ちゃんのお洋服はきれいですね」とか、子供たちに話しかけるのにやたらに敬語の接頭語である「御オ」を使う。このことから私は、目上に敬語を使う場合にも、子供の機嫌をとると同じように、もつぱら目上の機嫌をとることが目的



ではないかと考えるようになった。大体、目上に敬語を使わないと目上の機嫌きげんを損じ、結局自分に不利を招く。しかし子供に対するのと同じように目上の機嫌をとらなければならないという事実自体は、日本人において子供心が成人に達した後も持続することを物語っているのではなからうか。このことはまた先に紹介した、日本では子供と老人が最も自由と気ままを許されるという、ベネディクトの見解とも一致しているのである。

\*超自我 精神の発達過程で両親その他重要な人物のしつけや教えが内面化されたものをいう。精神分析の用語。

(土居健郎『「甘え」の構造(増補普及版)』弘文堂 二〇〇七年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 傍線部A「その点についてはかなり問題が存する」とあるが、具体的に何について、どのような問題があるのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は 13。

- ① ベネディクトが文化の類型を二つに分けて、日本が罪の文化ではなく、恥の文化の典型であるとするのは、彼女の極めて偏った価値観に依存するものであり、事実とは大きくかけ離れた見解であるということ。
- ② ベネディクトは日本を恥の文化の典型としたうえで、罪の文化は内面的な行動規範を重んじ、恥の文化は外面的な行動規範を重んじる時、彼女の主観で後者は前者よりも劣っていると見なされているということ。
- ③ 罪の感情と恥の感情は同一人物がしばしば同時に意識することなので、そもそも両者は不可分の関係であり、その意味でベネディクトが提唱した二つの文化に関する類型の前提が事実と相違しているということ。
- ④ ベネディクトによれば、罪の文化と恥の文化は優劣の関係にあり、後者の方が前者よりも劣っているとされていて、後者の典型は西洋人であり、外国の研究者たちはそれを承認しているということ。
- ⑤ ベネディクトが提唱した文化の類型を罪の文化と恥の文化の二つに分けて、後者の典型を日本とするのは妥当だが、問題なのはその前提として罪の感情と恥の感情が互いに全く無関係であるということ。

問二 傍線部B「西洋人の罪悪感」を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 14。

- ① 西洋人は、自分が属する集団を裏切ることにより罪悪感を抱くので、まるで人間関係の関数であると考えられている。
- ② 西洋人は、謝罪をすることによって初めて罪の意識が浄化されることを想定している。
- ③ 西洋人は、罪悪感を内面的な行動規範としてではなく、外面的な行動規範の問題として考え勝ちである。
- ④ 西洋人の罪悪感は、関係の断絶に導きやすい義理的な関係の中で極めて生じやすいのが特徴である。
- ⑤ 西洋人は裏切りの心理は意識せず、罪悪感は両親の影響を受けない非個人的なものから構成される。

問三 空欄部

C

に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

15。

- ① 類型
- ② 分類
- ③ 比較
- ④ 偏見
- ⑤ 区別

問四 空欄部 D、F、G に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① D…ところで F…しかし G…したがって
- ② D…しかし F…あるいは G…ところで
- ③ D…すなわち F…しかし G…あるいは
- ④ D…すなわち F…あるいは G…ところで
- ⑤ D…ところで F…すなわち G…したがって

問五 傍線部 E 「自分を輔弼してくれる人がほしい」が意味するものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

い。解答番号は 17。

- ① 自分の間違いを厳しく指摘してくれる人がほしい。
- ② 自分の代わりに欲求を表現してくれる人がほしい。
- ③ 自分を受け入れて忠告してくれる人がほしい。
- ④ 自分の考えを積極的に肯定してくれる人がほしい。
- ⑤ 自分のことを大人扱いしてくれる人がほしい。

問六 傍線部H「天皇は日本国家の象徴である」という日本の「天皇制」に対する筆者の見解について、四十五字以内で記しなさい。ただし、「甘え」、「イデオロギー」の二語を必ず用いること。解答は **国語解答用紙**。

天皇制とは **四十五字以内** である。

問七 傍線部I「報恩」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① 恩恵を与えること。
- ② 恩着せがましいこと。
- ③ 相手に感謝されること。
- ④ 相手を助けること。
- ⑤ 相手に恩返しをすること。

問八 傍線部「日本での子供と老人が最も自由気ままを許される」とあるが、このベネディクトの見解と一致する筆者の考えと

して最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 19。

① 敬語を使って子供や老人の機嫌を取るとは、日本人における幼心が大人になってからも続くことを表しているということ。

② 子供に対してだけでなく老人に対しても機嫌を取ること、その人にとって物事が様々な場面で有利になるということ。

③ 子供は未来の日本を支える存在であり、老人はこれまでの日本を支えてきた存在なので周りから重宝されるということ。

④ 日本では社会的にも経済的にも老人ばかりが手厚い支援を受けてきたので、これからは子供の支援も重視するということ。

⑤ 日本の甘えのイデオロギーを支えてきた敬語を使用することは、子供と老人の機嫌を取るときの最高の手段であるということ。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

20

く

24

1 人災による損害をホシヨウする。

20

- ① 補
- ② 保
- ③ 歩
- ④ 捕
- ⑤ 穂

2 宿題の作文を見直してコウセイする。

21

- ① 香
- ② 校
- ③ 構
- ④ 更
- ⑤ 厚

3 実験を行い、仮説をケンシヨウする。

22

- ① 障
- ② 詳
- ③ 尚
- ④ 涉
- ⑤ 証

4 犯人の身柄をコウソクする。

23

- ① 則
- ② 束
- ③ 塞
- ④ 促
- ⑤ 即

5 犬はシバラくして、また走り始めた。

24

- ① 漸
- ② 尽
- ③ 且
- ④ 暫
- ⑤ 間

	解答番号	解答欄					
I	1	①	②	③	④	⑤	5点
	2	①	②	③	④	⑤	5点
	3	①	②	③	④	⑤	5点
	4	①	②	③	④	⑤	5点
	5	①	②	③	④	⑤	5点
	6	①	②	③	④	⑤	5点
	7	①	②	③	④	⑤	5点
	8	①	②	③	④	⑤	2点
	9	①	②	③	④	⑤	2点
	10	①	②	③	④	⑤	2点
	11	①	②	③	④	⑤	2点
	12	①	②	③	④	⑤	2点



I問四

三味線は、言葉に相槌を入れるのに適しており、モノローグに向かない日本語との相性が良かったから。

	解答番号	解答欄					
II	13	①	②	③	④	⑤	5点
	14	①	②	③	④	⑤	5点
	15	①	②	③	④	⑤	5点
	16	①	②	③	④	⑤	5点
	17	①	②	③	④	⑤	5点
	18	①	②	③	④	⑤	5点
	19	①	②	③	④	⑤	5点
	20	①	②	③	④	⑤	2点
	21	①	②	③	④	⑤	2点
	22	①	②	③	④	⑤	2点
	23	①	②	③	④	⑤	2点
	24	①	②	③	④	⑤	2点

Ⅱ問六

天皇制とは甘えを理想化し、甘えの支配する世界を人間的な世界と考える日本のイデオロギーを制度化したものである。